

うシリーズの「ヴァイキング時代」と銘打つには、著者も自覚するように(一八頁)限られた部分に過ぎず、例えばヴァイキングII「農民」という側面等は殆ど検討されない。しかしそれでも本書は、ヴァイキング研究における近年の問題意識を如実に反映し、ナシヨナリズム、ヴァイキングの「商業」といった未だ誤解を生じやすいテーマを積極的に議論の俎上に載せた、意欲的なヴァイキング史入門書である。初期中世ヨーロッパにおいて、信仰をはじめ様々な面で異彩を放つ「ヴァイキング」という存在に少しでも興味を持たれた方には、一読をお薦めする。

(四六判) 二八七頁 二〇〇六年三月

京都大学学術出版会 税別一八〇〇円)

(松本 涼)

マリア・ロサ・メノカル著(足立孝訳)

『寛容の文化』

近年の中世スペイン史研究上のキータームであり、また今日の宗教間の対立を考える際に寄与するところの大きい宗教的寛容

を軸に、アル・アンドルスにおけるイスラム教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒の文化混雑を概説したのが、本書マリア・ロサ・メノカル著(足立孝訳)『寛容の文化——ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン——』名古屋大学出版会、二〇〇五年(原著: Maria Rosa Menocal, *The Ornament of the World: How Muslims, Jews and Christians Created a Culture of Tolerance in Medieval Spain*, New York, 2002)である。

本書の構成は左の通り。

一・序論(一一—一頁)

二・第一級の土地の簡潔な歴史(二二—四七頁)

三・記憶の宮殿(四九—二九七頁)

序論では、アブド・アッラフマーンのアンドルス亡命からムスリムの半島への侵入の経緯が前史として述べられ、次いで三宗教によって育まれた寛容の文化を、ヨーロッパの歴史と文明に多大な影響を与えたものと意義付けることで、本書の執筆意図を明らかにしている。続く第二部「第一級の土地の簡潔な歴史」では、第三部で述べられる諸々のエピソードを經由しつつ、概説

的にアンドルス史が論じられる。そして本書の中心である第三部では、その舞台に登場する様々な史実を背景にしながら、叙情豊かに寛容の文化に関する種々のエピソードが描かれている。

著者マリア・ロサ・メノカルは中世スペイン文学を専門としていることもあり、本書で引かれている文化混雑の事例には、やはり文学に関するものが圧倒的に多い。以下、紹介者にとって興味深いと感じられた事例を二点紹介していこう。

一つ目はその文学に関するものから、「愛と愛の歌」(一一四—一三三頁)では、

詩と詩形式の文化混雑の様子³が語られる。具体的には、一一世紀半ばごろの俗語による恋愛詩集の成立にはじまり、ムスリムの詩歌がノルマン人を介してキリスト教圏へ伝播したこと。そして俗語の詩作活動の結果生じた、アンドルスにおける民衆文化と宮廷文化の「結婚」がその例として取り上げられる。ロマンセ(スペイン独特の詩形式)におけるムスリムの文化的影響は、一九世紀のロマン主義の時代(例えばリーバス公爵 *Duque de Rivas* など)にすでに指摘されているが、それが一〇六四年のノル

マン人の侵略と同化、俗語による詩作の成立を経たものであるというのが興味深い。

またロマン主義期にすでに指摘されていた文化的影響の事例として、第三部の随所で述べられる建築様式の混淆が挙げられる。「モスクと棗椰子」(五〇―六三頁)では、ムスリムによるローマ建築の再利用について言及され、「カステイリヤ宮廷の外国人高官」(二四二―二五八頁)ではイブ・ハルドゥーンに焦点を当てる中で、カステイリヤ国王によって模倣され建設されたイスラム風建築、セビーリヤのアルカサルが取り上げられる。また、特に紹介者の目を引いたのが「アルハンブラにて」(二五九―二六七頁)の次の一節である。そこでは、イサベル女王がモスクを教会に見立てその場で祈りを捧げたことについて、「(当時のキリスト教徒がモスクでキリスト教の祈りを捧げることを)決して異質なものとみなしていなかったことの証」であるという。一九世紀には(あるいは今でも?)、アンダルスの建築芸術とムスリムの民族性を表象するとみなされていたアルハンブラ宮殿も、本書では寛容の文化という記憶が宿る場所として描かれている。

ここに至り「アルハンブラの思い出」は、全く逆に受け取られているのである。

このように本書は、中世スペイン史を専門としない紹介者にとっても興味深いエピソードに富んだ一冊である。特に、中世スペイン史で研究テーマを探そうとする学部学生の好奇心と想像力を大いに刺激する点とは間違いない。ぜひご一読をお勧めしたい。

(A5判 三三四頁 二〇〇五年八月)

名古屋大学出版会 税込三九九〇円)

(菊池 信彦)